

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820002

研究課題名(和文) ソヴィエト・ロシア建築の全体主義化においてマスメディアの果たした役割の研究

研究課題名(英文) A study on the role of the mass media in totalitarianization of Soviet architecture

研究代表者

本田 晃子 (HONDA, Akiko)

北海道大学・スラブ研究センター・非常勤研究員

研究者番号：90633496

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、1930年代から1950年代にかけて生じたソヴィエト・ロシア建築の全体主義化において、マスメディアの果たした役割を検証することにある。このような目的のもとに、スターリンの首都再開発計画ゲンプランによって激しい変化のさなかにあった首都モスクワをめぐる、建築批評のテキストおよび映画作品をとりあげた。そしてこれらのメディアによって媒介された言説・イメージの分析を通して、連邦の特権的中心としての首都モスクワという神話的建築空間が形成されていった過程を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the roles of the mass media in the process of totalitarianization of Soviet architecture between the 1930s and the 1950s. It mainly dealt with architectural journals and films concerned to greatly changing Moscow under the Stalin's Genplan (General Plan), which was adopted in 1935 for large-scale reconstruction of the old city.

It became clear in this study that discourses and images in the media produced simulacra of the new ideal capital, which would never be realized, and that they played a crucial role to mythicize Moscow as the absolute center of the USSR.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：建築史 表象文化論 ソ連 全体主義 メディア論

## 1. 研究開始当初の背景

ソ連邦の建設期にあたる1920年代から30年代にかけて、建築にはしばしば文字通りのそれを越えた、新たな社会の“建設”という象徴的意味が課された。そこで建築家たちには、単に建てることを越えて、新たな共同体の姿を建築というイメージを通して人びとに示すことが期待された。

そしてこの新たな建築のイメージの流通・共有において大きな役割を果たしたのが、マスメディアである。設計図や写真、批評などを掲載した建築雑誌の出現、あるいは建築をめぐる報道や映画。20世紀前半、マスメディアを介した建築に関する情報は、実際の建築空間の経験を著しく凌駕していった。この時期に描かれたソヴィエト宮殿のような象徴的建築が、たとえ実際には建設されずとも、建てられた建築物よりも大きな影響力を有することができたのは、これらのメディアの力によるところが大きい。そのような意味で、マスメディアがソヴィエト建築に与えた影響は計り知れないものがある。しかし、従来のロシア及び欧米のソヴィエト建築研究は、これらの建築をめぐるメディアをあくまで二義的な対象として扱い、その重要性を等閑視してきた。

さらに、文学や絵画といった芸術ジャンル同様、1930年代後半には建築の分野でも、社会主義リアリズムが唯一の真正な様式として確立される。しかし社会主義リアリズムとは、当時の建築家らの活動の中から自然と生じた理論やスタイルではなかった。逆にそれは、建築の外部、すなわち党や指導者の意思、それを事後的に正当化し可読化した建築批評、そしてこのような価値基準に基づいて(再)生産された無数の建築的イメージから形成されていた。社会主義リアリズム建築とは、建築それ自体の内からではなく、その周囲を取り巻くこれらメディア上の言説とイメージによって形成された、いわば核を持た

ない中空のスタイルだったのである。そこで浮上するのが、ソヴィエト建築の全体主義的体制への移行においてマスメディアが果たした役割という問題に他ならない。

これまでセリム・ハン=マゴメドフ、ドミトリー・フメリニツキー、ヒュー・ハドソンらによる既存のソ連建築研究では、建築学的観点からするとナンセンスな社会主義リアリズムの建築理論そのものよりも、その背後にある組織や権力構造の変化にソ連建築の全体主義化の原因を求めることが行われてきた。しかし他方で、当時メディア上で(再)生産された、社会主義リアリズム建築に関わる膨大な言説やイメージを、その陳腐さゆえに等閑視してしまってもよいのだろうか。このような疑問に基づき、本研究ではソヴィエト建築の全体主義化においてこれらのマスメディアが果たした役割に焦点を当てて試みた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、上述の問題意識の下に、メディア上の建築言説・イメージを分析することにある。その中で、いかにして社会主義リアリズムという建築様式が形成されたのか、また建築家たちと彼らの作品がいかにして全体主義的なメカニズムの中に組み込まれていったのかを明らかにすることが、最終的な目標である。

このような問題設定に基づき、本研究の具体的な分析対象としたのが、1935年に採択され戦前・戦後の時期にかけて実施された、首都モスクワの再開発計画、通称ゲンプランである。ただしゲンプランは、公共交通網からシンボリックな記念碑までにいたる、広範かつ多岐にわたる要素からなる。したがって本研究内では、モスクワ地下鉄、全連邦農業博覧会、映画の中の新しいモスクワという三つテーマに限定して同計画の分析を試みた。そしてソ連邦の頂点としての新首都モスク

ワという神話的空間が、メディアという場を通じてどのように構築されていったのかを論じることを目指した。

### 3. 研究の方法

具体的には、下記の三つのテーマに従って研究を進めた。

#### テーマ1

モスクワ地下鉄駅における「自然」のモチーフのイデオロギー的機能の分析

#### テーマ2

アレクサンドロフ監督映画『輝ける道』(1940年)における全連邦農業博覧会の建築空間の分析

#### テーマ3

メドヴェトキン監督映画『新モスクワ』(1938年)におけるモスクワ・イメージの分析

上述のテーマを論ずるにあたり、まず一次資料の収集を行った。具体的には、ロシア国立図書館・歴史図書館を訪問し、ソヴィエト時代の建築家同盟の実質的な機関誌であった『ソ連建築』をはじめ、『モスクワ建設』『ソヴィエト建築』『建築アカデミー』等の主要な建築雑誌、イズヴェスチヤやプラウダなどのソ連時代の新聞記事、パンフレット、記念刊行された書籍、さらには再開発下のモスクワを題材に撮影された複数の映像作品を利用した。また、モスクワの国立建築博物館およびモスクワ建築大学のアーカイヴに収蔵された当時の建築コンペティションに投稿された設計図やドローイング、模型などの調査も並行して行った。

その後、これらの資料に基づいて、メディア上の建築と実際にゲンプランに基づいて建設された建築空間、ないし異なった媒体間におけるイメージ・言説を比較対照し、先行研究等の二次資料も参照しながら、これらの

言説・イメージの背後にはどのような政治的・文化的文脈が存していたのかを検証した。

### 4. 研究成果

テーマ1では、ゲンプランの一環として建設されたモスクワ地下鉄駅構内の、自然をモチーフとした大量の装飾に着目した。1930年代には、20年代のアヴァンギャルドの機械の美学は全面的に否定され、「有機性」「生命」「自然」といった主題が建築デザインにも求められるようになった。その一方で、都市開発や地下鉄建設に代表される「自然の克服」は、引き続きソ連政府の重要なスローガンであり続けた。そこで問題となるのが、克服すべき自然と理想的自然というこれら二つの自然と、建築の関係である。

このような観点から、テーマ1では当時の建築雑誌に掲載された批評のテキストの分析を行った。そして自らの法則にのみ自律的に従う盲目の「機械的」自然と、周囲の環境などの所与の条件によって機械的に決定される建築構造が同一視され、それらを理想化された自然の装飾が被覆することにより、社会主義のイデオロギーである「有機的自然」の「機械」に対する優越性が表現されていたことを明らかにした。

テーマ2では、エイゼンシュテインの弟子であり、スターリン期を代表する映画監督でもあるグリゴリー・アレクサンドロフの映画作品『輝ける道』をとりあげ、同映画のクライマックスにあたる、モスクワで開催された農業博覧会のシーンを分析対象とした。

その結果、同シーンでは実際の空間で撮影されたショットを恣意的にモンタージュすることによって、現実のモスクワや博覧会会場とは異なる空間イメージが構築されていたことを指摘した。さらに、博覧会のパヴィリオン内の場面では、舞台美術のように人工的に作り上げられた建築空間の消失点にスターリン像が設置され、指導者を中心とする

象徴的ヒエラルキーが構成されていることを明らかにした。

テーマ3では、アレクサンドル・メドヴェトキン監督によって制作された、映画『新モスクワ』中の複数のモスクワ・イメージを分析対象とした。同映画中では、主人公らの生活する現実のモスクワ、現在・未来のモスクワの模型と映像、さらにはモスクワをもとに築かれた新しい街という複数のモスクワ・イメージが登場し、重要な役割を演じる。本研究では、スターリンのゲンブラン礼賛という同映画の目的にもかかわらず、互いに互いを参照することで反復増殖するこれら複数のモスクワ像とは首都の唯一性・絶対性を解体するものであり、スターリン期のモスクワの神話化と矛盾するものであったことを明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

本田晃子、映画は建築する——『輝ける道』に見る社会主義リアリズムの象徴空間、ロシア語ロシア文学研究、査読有、第45号、2013、182 - 204頁。

Akiko HONDA, Post-Soviet Architecture: Future-phobia, *Japanese Slavic and East European Studies*, 査読有, No. 33, 2013, pp. 3-16.

本田晃子、ミチューリンの庭——社会主義リアリズム建築と自然、ロシア語ロシア文学研究、査読有、第44号、2012、154 - 174頁。

[学会発表](計 7件)

本田晃子、都市は運動する：映画『新モスクワ』のなかのモスクワ、表象文化論学会、2013年11月9日、東京大学(目黒区、東京)。

本田晃子、動く都市/静止する都市 アレクサンドル・メドヴェトキンの『新モスクワ』、日本ロシア文学会、2013年11月2日、東京大学(文京区、東京)。

Akiko HONDA, Architecture in the Media: Ivan Leonidov's Virtual City in the Architectural Journal SA, The Fifth East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, August 10, 2013, Osaka University of Economics and Law (Yao, Osaka).

本田晃子、墓廟から神殿へ：レーニン廟とソヴィエト宮殿にみるレーニンの建築表象の変遷、日本ロシア文学会北海道支部研究発表会、2013年7月13日、札幌大学(札幌市、北海道)。

本田晃子、機械的自然と自然的機械——モスクワ地下鉄建設にみる“自然の克服”、表象文化論学会、2012年11月10日、東京大学(目黒区、東京)。

本田晃子、映画は建築する——G.アレクサンドロフ監督『輝ける道』から見る全連邦農業博覧会、日本ロシア文学会、2012年10月7日、同志社大学(京都市、京都)。

Akiko HONDA, Socialist Realism Architecture and Soviet Cinema: The All-Union Agricultural Exhibition (VSKhV) in The Shining Path, 4th East Asian Conference on Slavic and Eurasian Studies, September 5, 2012, Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies (Kolkata, India).

[図書](計 2件)

Akiko HONDA and others, Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies, *Image of the Region in Eurasian Studies*, 2014. 共著、現在印刷中につき頁数未定。

本田晃子、天体建築論 レオニドフとソ

連邦の紙上建築時代、東京大学出版会、2014年、343頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

本田 晃子 (HONDA, Akiko)

北海道大学・スラブ研究センター・非常勤  
研究員

研究者番号：90633496